

## トハーリスタンにおける地域間関係の考古学的検討

岩井俊平

## はじめに

漢文史料に「吐呼羅国」「吐火羅国」「靺婁国」などと記録されている場所は、現在のアフガニスタン北部と、アム川を北に越えたウズベキスタン南部・タジキスタン南部を含む地域を指している（図1）。そもそも、「大夏」としてこの地域が『史記』大宛伝に登場した段階では、アム川の南側だけを指していたものが、『魏書』西域伝（『北史』西域伝）に「吐呼羅」として再び登場した時には、アム川の南北を含む地域の名称として使用されていた。7世紀前半にアム川流域を訪れた玄奘も、「靺婁国」あるいは「靺婁国故地」としてアム川南北の諸地域をまとめている。一方、7世紀後半にムスリム勢力がこの地方に進出して以降、アラビア語・ペルシア語の史料にもトハーリスタン Tokhāristān, すなわち「ト

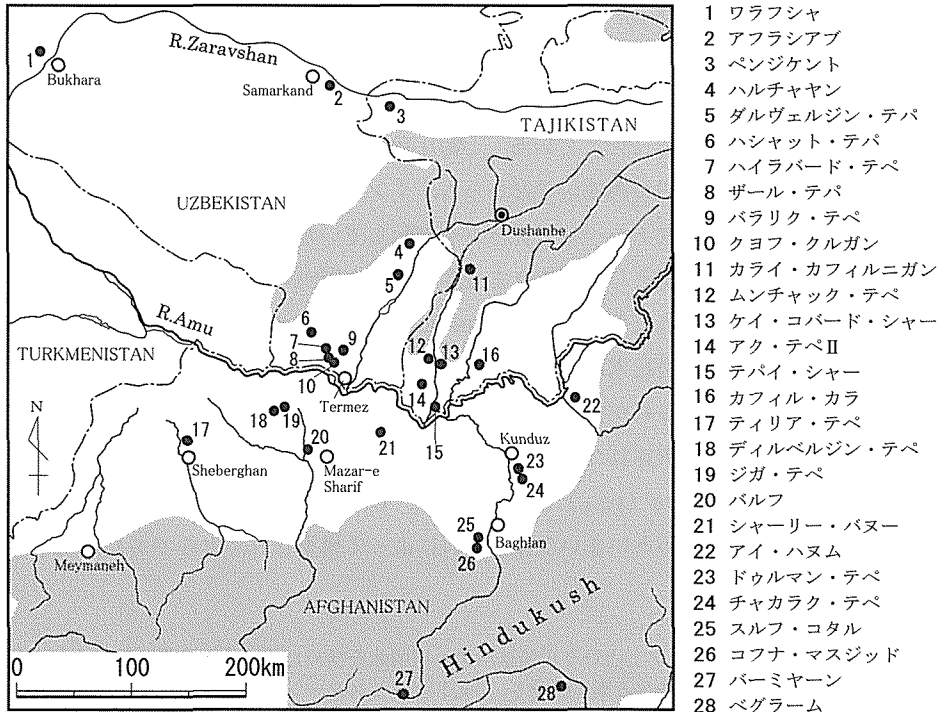


図1 トハーリスタン周辺地図

「トハラ人の土地」と呼ばれる地域が登場する。史料によってその指し示す内容は異なっており、トハリスターンの範囲を確定することは難しいが、ミノルスキーは10世紀後半に成立したペルシア語地理書 *Hudūd al-‘Ālam* の翻訳の中でトハリスターンについて解説し、イスラーム側史料の指すトハリスターンは、バルフ以東、アム川以南と理解されるのが一般的であると述べている [Minorsky 1970: 337]。したがって、時期を異にする東西両史料においてトハラという名称は共通しているのに、指し示す範囲がまったく異なっているのである。桑山正進も、『大唐西域記』の訳注の中でこの問題を指摘している [桑山 1987: 125-129]。本稿は、この東西両史料における認識の違いがいかにして起こったのか、という問題を、考古学の立場から解決しようと試みるものである。

## I トハリスターン考古学に関するこれまでの研究

まず最初に、本稿で扱うトハリスターン<sup>1)</sup>という地域がこれまでどのように認識されてきたのかを確認し、考古学に関する研究史を概観する。

遊牧民と定住民の生活域が交差する中央アジアにおいては、定住民である各城邑の支配者たちが、遊牧民の支配者に役属するという構造が一般的であった。トハリスターンもその例にもれず、『史記』大宛伝にみられる「大夏は大宛の西南二千余里、媯水の南にある。……大月氏が西へやってくると、ここを攻撃して敗り、大夏を家臣とした。」という記述、さらには『大唐西域記』覩貨邏国総述にみられる「数百年よりこのかた、王族は嗣をたち、土地の豪族が力を競いあい、各々君長をかってに立て……原野を仕切り、区分けしているけれども、みな突厥に配下として仕えている」 [桑山 1987: 10] という記述からその状況をうかがうことができる。各正史の西域伝などからも、クシャーン、キダーラ、エフタル、突厥といった遊牧民たちが、順次トハリスターンを支配していたことが分かるのである。

こうした状況に対する解釈として、これまで考古学の立場からは、遊牧民による都市への侵入・破壊が一部で想定されてきた [Кругликова 1974: 99; Пидяев 2001: 43]。特に旧ソ連における研究では、4世紀末から5世紀の間にこのような都市の破壊が集中するという考古学的成果を援用して、これが古代奴隸制社会から中世封建制社会への画期にみられる社会的混乱を示していると解釈された [Пугаченкова, Ртвеладзе и др. 1978: 160-161; Седов 1987: 116; Брыкина (ред.) 1999: 5, 11]。しかし、こうした見解が依拠している遺跡の年代観は、出土状況があいまいな貨幣資料によって構築されたものであり、誤った部

1) 以後、「トハリスターン」という用語は、アム川南北を含めた地域全体を指す呼称として使用する。また、アム川を境に北と南に区分し、「北トハリスターン」などと呼称する。なお、アラビア語・ペルシア語史料では、アム川以南・バルフ以西を下トハリスターン、アム川以南・バルフ以東を上トハリスターンと呼び分ける場合がある。注21も参照。

分も多い。筆者が行った土器編年によれば、少なくともクシャーン朝崩壊後から8世紀頃までは、都市の廃絶が一定の時期に集中することはない [岩井 2003: 52]。さらに、トハリスターン全体で精製土器に共通性が認められ、支配的な遊牧民が交代する政治的画期に際して、土器の器形そのものが変化するということも確認できない。したがって、定住民たちはその支配者とは関係なく従来どおりの土器を製作し続けていたと考えられ、遊牧民支配者による都市への侵入と破壊という事象を、積極的に支持することは難しい<sup>2)</sup>。

また、このような遺跡ごとの解釈とは別に、トハリスターン全体、あるいは他地域との考古学的文化の関係を論ずる研究が、近年行われるようになってきた。ウズベキスタンのアンナエフは、北トハリスターンの様々な遺跡を分類・検討し、特に7世紀から8世紀になって、この地域が北方のソグド地域と密接な関係を持ったことを述べる [Аннаев 1988: 75-76]。非常に重要な見解であるが、本稿で問題とする漢文史料とアラビア語・ペルシア語史料における「トハリスターン」認識の違いを意識したものではなく、トハリスターンとソグドの関係についての具体例には一切触れていない。また、フランスのアフガニスタン考古学調査団が行ったクンドゥズ以東の踏査では、採集土器を他地域と詳細に比較して、アンナエフと同様にトハリスターンとソグドとの関係を論じている [Lyonnet 1997: 277-279]。ここでは、東西両史料の認識の違いについても言及しているのだが、西突厥支配域における考古資料の共通性を中心にとらえ、トハリスターン内部での地域的差異には注意を向けていない。さらに、西突厥の支配によって、本来のバクトリア人（トハリスターン地域の住民）が周辺に追いやられていると認識している点 [ibid.: 279] にも、古い時期からの土器の連続性を考えた場合には首肯しがたい。

以上のように、これまでのトハリスターンに関する考古学的研究は、遊牧民の定住地域への侵入という構造を様々な考古資料から想定してきたといえる。また他地域との関係については、遊牧民の広域支配によって生まれた共通性に重点がおかれていたという点に特徴がある。しかし、先に述べたとおり、遊牧民による都市の破壊といった事実は支持できるだけの資料に乏しく、トハリスターン全体の歴史を語る上で有効な仮説とは言えない。さらに、冒頭に触れた東西両史料における認識の違いを考察するためには、これまで指摘されてきたトハリスターンの考古資料の共通性だけでなく、その地域的な差異についても検討する必要があると考えられる。

このような問題点をふまえた上で、以下の章では、7世紀から8世紀のトハリスターンで出土する考古遺物の地域性に着目し、東西両史料における「トハリスターン」認識の違いが起こった原因を考察する。さらにその歴史的背景についても、これまでの仮説を批判的

---

2) そもそも、ヨーロッパとはまったく環境が異なる中央アジアにおいて、奴隸制から封建制へ、という変化をそのままあてはめることにも問題がある。したがって、旧ソ連圏の研究者が使用する「初期中世 (Раннесредневековье)」という時代区分も、ここでは使用しない。

に検討することで明らかにしていきたい。

## II 土器分布圏の変化

### 1 トハリスターンの共通性

考古学的な見地からトハリスターンを眺めてみると、日常使用される土器から、王宮や各種寺院に描かれる壁画の文様に至るまで、広く共通性を持っていることが分かる。特に壁画のモチーフは、現在のイランから新疆ウイグル自治区、さらにその一部は日本とも共通のものが認められ、いわゆる「シルクロード」を經由して伝わったものとして様々な研究が行われてきた<sup>3)</sup>。しかし、壁画や彫像のモチーフのように広範囲に分布するものによって、トハリスターン周辺における地域的なまとまりを抽出することは難しい。そこで本節では、地域的なまとまりを鋭敏に反映する遺物として、土器を取り上げる。土器には、素材である粘土の可塑性とその壊れやすさのために、時間的差異と地域的特色が明確に表れるからである。

筆者は以前、トハリスターン地域の土器編年を行い、クシャーン朝崩壊以後の精製土器をPK (Post Kushan) I～IV期という4段階におおまかに区分した [岩井2003]。南北トハリスターンからは、この全時期を通じて共通の精製土器が出土している。本稿の対象となるのはPKⅢ期からIV期であり、絶対年代では7世紀以降8世紀前半までとなる<sup>4)</sup>。時期的な指標となるのは碗形土器、把手付きの瓶形土器、そして大甕である。いずれもこれより早い段階から出現しており、トハリスターン全体で普遍的に出土する。以下で、それぞれの器形についてその特徴を確認していく (図2参照)。

碗は、直立する短い口縁を持ち、見込み部中心から放射状にミガキによる文様 (暗文) を重ねていく装飾法が特徴的なものである。PKⅡ期ではほとんどの個体に暗文を施し、さらに口縁の長いものが多いのに対し、PKⅢ期にはこの装飾が単純化、あるいは施されなくなるのと同時に、口縁の立ち上がりが短いものばかりになる<sup>5)</sup>。また、確実にPKⅣ期まで下

3) こうした研究は枚挙にいとまがないが、近年刊行された『世界美術大全集 東洋編』の中央アジアの巻 [前田・田辺編1999] が、中央アジアにおける壁画や彫像などに関する研究史も含まれており、重要である。

4) 貨幣の一括出土資料との共伴関係などから、各時期に次のような絶対年代を与えている。すなわち、PKⅠ期は3世紀後半～4世紀末、Ⅱ期は4世紀末～6世紀後半、Ⅲ期は7世紀初頭～7世紀後半、Ⅳ期は7世紀後半～8世紀前半、である。この年代については、今後ある程度の変更も考えられるが、PKⅢ期が6世紀まで遡る可能性はほとんどない。なぜなら、Ⅲ期の標準資料を提供するチャカラク・テペ上層からは、もっとも古い貨幣でも7世紀以降のものしか出土していないからである。

5) PKⅡ期にも口縁の立ち上がりが非常に短い資料が存在する。しかし、逆にPKⅢ期にはⅡ期にみられたような口縁の長い個体は存在しないため、出土量が多ければ、おおまかな時期の判断も可能である。

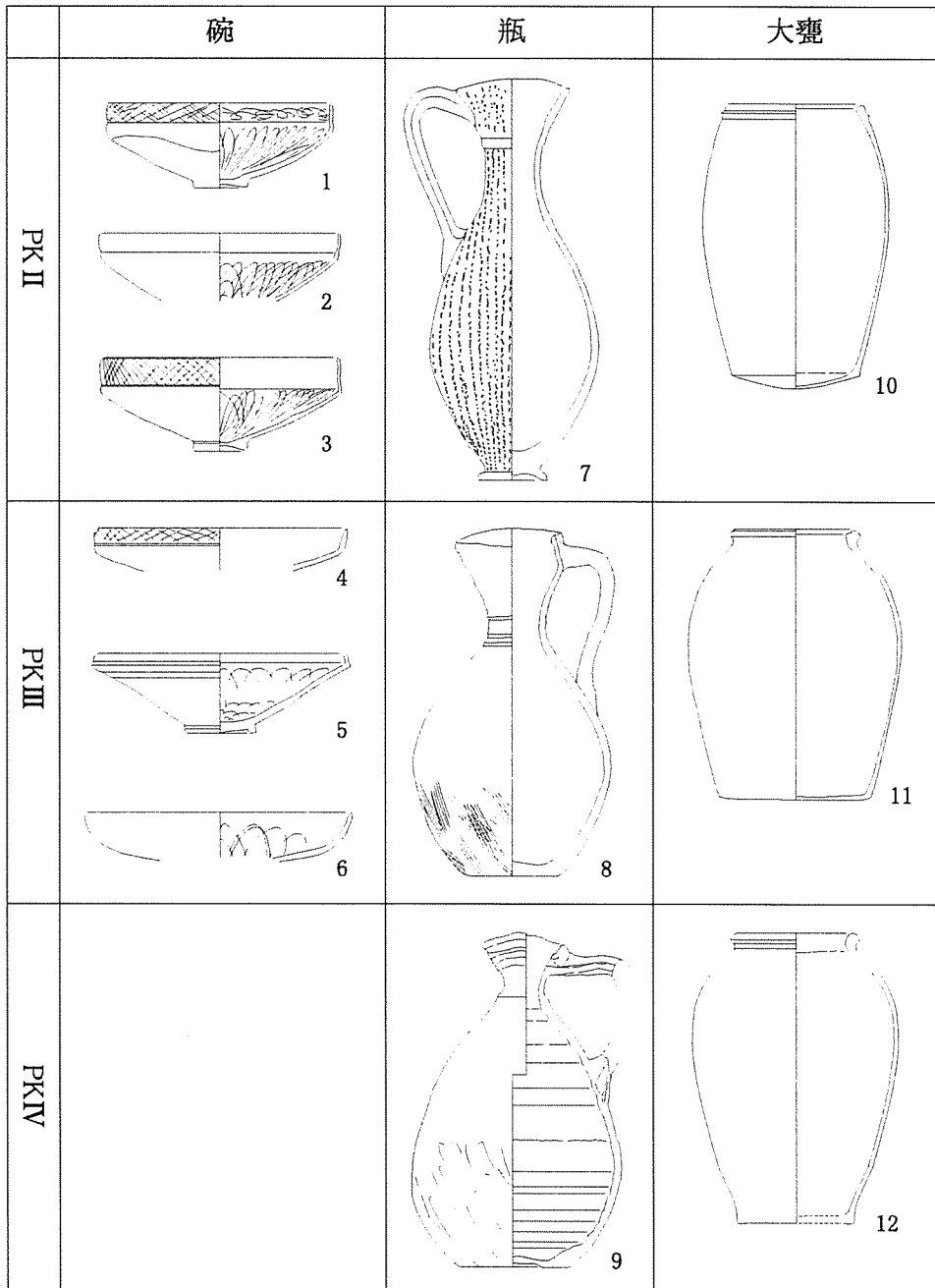


図2 トハースターンの土器（碗・瓶は1/6，大甕は1/24）

がる層位からは、この碗は出土しなくなっている。

瓶については、いわゆるサーサーン銀器にみられる水瓶を模倣した土器で、PK II 期に出現した段階では金属器と同様の形態をロクロで作り、体部には暗文を施し、底部には高台を

取り付けている。これがPKⅢ期・Ⅳ期になると、全体を粘土紐積み上げによって整形し、高台がなくなって平底となっている。また、この段階では暗文も施さない。この変化の流れは、南北トハーリストーンで完全に共通しており、南ではチャカラク・テペ中層から上層への変化、北ではダルヴェルジン・テパの市街区出土資料から、それより新しい時期に属する城塞の上層出土資料の変化によってそれを確認することができる。

大甕は、PKⅡ期以前においては丸底で、器高の中段に胴部最大径がある卵形の形態を有していた。口縁は内湾するか直立し、1条から2条の稜を持つ場合が多い。これがPKⅢ期になると、徐々に平底になるとともに肩部が張り出し、口縁は大きく外側に反る資料が増える。PKⅣ期は、すべての大甕がそのような形態に変化した段階である。この変化の流れも、瓶の場合と同様に、先に挙げた二つの遺跡で層位的に確認することができる。したがって、南北のトハーリストーンで土器の変化の流れが共通しており、アム川の南北が一体であったことが確認できるのである。

## 2 コップ形土器の年代

1で確認した共通性の一方で、PKⅢ期以降になると、北トハーリストーンにしか出土しない精製土器がいくつか出現する。そのひとつがコップ形土器である。ダルヴェルジン・テパの城塞の最上層(DTC I)では、このコップ形土器が、平底で大きく外側に反った口縁を持つ大甕や、平底で粘土紐積み上げによって作られた瓶と共存している(図3-1・2)。したがって、この資料はPKⅣ期のもものと判断することができる<sup>6)</sup>。

コップ形土器は、平底かあるいは高台を持ち、丸い胴部から短く直立する口縁が立ち上がり、環状の把手が付いている<sup>7)</sup>。図3-2の資料は、焼成後に表面全体に塗彩を施している。この土器は、これまで北トハーリストーン各地の遺跡で出土してきたが、その年代観は報告者によって異なっていた。以下、いくつかの遺跡でその出土例を検証していく。

テルメズの北方約26 kmに位置するザール・テパでは、市街区、城塞ともに発掘が行われ、特に城塞では遺構に従った層位的な発掘によって出土土器を分類している。発掘者のアンナエフによれば、おおきくⅠ層(下層)・Ⅱ層(上層)の二時期を確認し、各層はさらに二つの段階に分かれるという[Аннаев 1988: 20-21]。その出土土器(図4)の中で特に

6) DTC Iからは、図示した以外にも、コップ形土器の把手と考えられる破片が非常に多く出土している。

7) 把手には1連のものと同様に2連のものがあり、さらに器高の高さにも違いがある。これはおそらく、模倣した金属器の系統の違いであり、土器もそれにしたがっていくつかの系統に分けることが可能であろう。しかし、現段階の資料数ではそれを細かに検討することが難しいので、本稿ではコップ形土器として一括する。

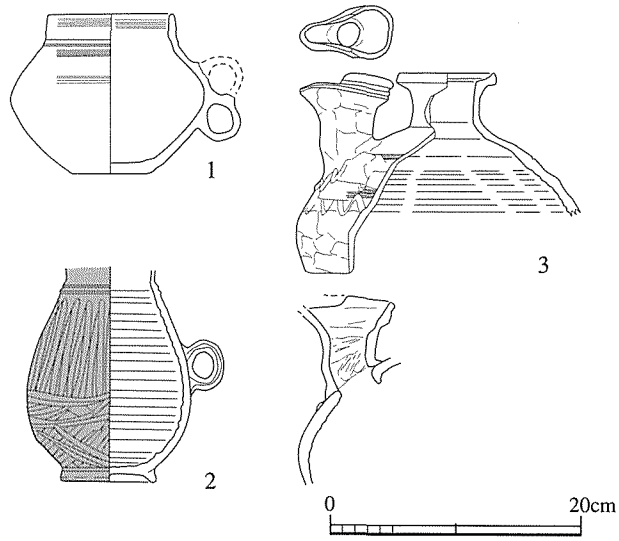


図3 DTC I の出土土器

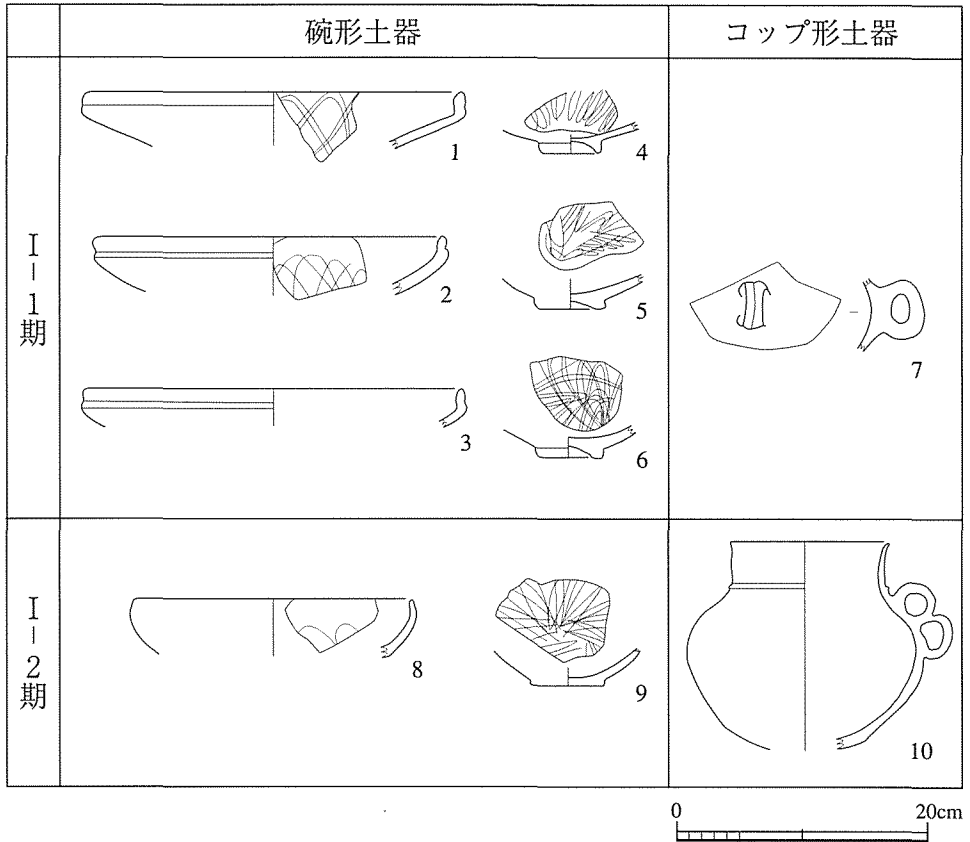


図4 ザール・テバ城塞の出土土器

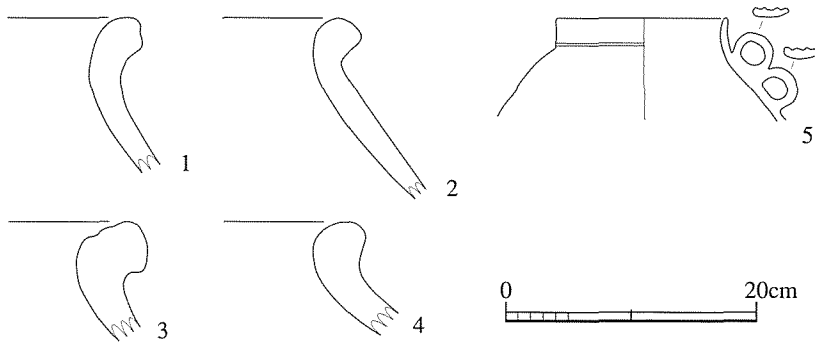


図5 クヨフ・クルガンの出土土器

注目されるのは、暗文を持った碗形土器である。ザール・テパ出土資料をみても、I層の1段階（I-1）から2段階（I-2）にかけて、暗文を施した資料が減り、その中の1点（図4-8）については、非常に単純化した装飾になっていることがうかがえる。ここで先に確認した碗の変遷に照らして考えれば、I-2は確実にPKⅢ期よりも新しい層位と考えられる。I-1についても、長い口縁を持つ資料が1点も存在しないことから、PKⅡ期でも後半、さらにはPKⅢ期に十分及んでいると考えて問題ない。したがって、このザール・テパの城塞のI層は、早くとも6世紀後半以降の居住層であり、そのほとんどは7世紀以降のものである。しかし、アンナエフはこのI層全体を、出土貨幣のみによって5世紀後半から6世紀前半に位置づけた [Annaev 1988: 45]。その後、ソロヴィヨフも北トハリストアン出土土器を総覧する著書の中で、この年代観を追認している [Соловьев 1996: 18-19]。ここで問題となるのは、このI層からコップ形土器が出土しているということである（図4-7, 10）。アンナエフやソロヴィヨフに従えば、I-2出土のコップ形土器も5世紀後半～6世紀前半の資料ということになる。しかし、上で示したように、I層全体は6世紀後半以降のものであり、特にI-2は確実に7世紀以後に下がる層である。したがって、このコップ形土器はやはり7世紀前後のものであり、ダルヴェルジン・テパの城塞と年代的に一致して行くことになる。

次に、ザール・テパの南東に所在し、同じ灌漑網の中に位置するクヨフ・クルガンの例をみてみよう（図5）。この遺跡は、これまで5世紀頃に出現するとされてきた小型要塞のひとつであり、封建制開始の基準ともされてきた種類の遺構である。アンナエフは5世紀半ばという年代を想定しており [Annaev 1988: 40, 60]、ソロヴィヨフもほぼこれを追認している [Соловьев 1996: 17-18]。その根拠となっているのは、暗文を施した土器が出土しないことであるが、すでに碗と瓶の変遷過程でみたように、これは逆に7世紀以降に顕著な現象である。さらに、床面出土の大甕（図5-1～4）はすべて口縁が外側に反る形態で、これが5世紀半ばまで遡ることは考えられない。こうした大甕とともに床面から出土したコップ形



土器(図5-5)は、やはりPKⅢ期以降、すなわち7世紀以降の資料と考えられるのである<sup>8)</sup>。

これ以外にも、コップ形土器は、もともと7世紀以降に位置づけられていたハジャット・テパⅣ層からも出土している。この層は、下層であるⅢ層までは存在していた粗雑な暗文が消失し、さらに瓶や大甕の口縁部から、明らかにPKⅣ期に属する。こうしたことを考え合わせると、これまで5世紀から8世紀までの広い年代を与えられていたコップ形土器は、すべて6世紀後半以降の資料であったことになる。

また、これまでほとんど知られていなかったが、このコップ形土器の胴部に彩画を施した資料が相当数存在することが明らかになった [山内 2001]。古くは、ピゴットがクエッタ周辺出土として紹介しているが [Piggott 1949]、日本においても近年展示会で公開されたものが数点存在する [田辺監修 2000: 109]<sup>9)</sup>。胴部に施す文様の中に連珠円文を多用することが特徴のひとつである。連珠円文はイランから新疆地域、さらには日本にまでみられるモチーフで、これまでの研究ではいずれも6世紀後半以降の年代が与えられている。これによって、コップ形土器の年代観を補強することが可能である。

このように、北トハーリスタンにおいては、PKⅢ期からⅣ期に相当する多くの遺跡で、コップ形土器が出土しているということが明らかになったのである。

### 3 小 結

以上、南北トハーリスタンの共通性をみたあとに、北トハーリスタンのみで出土するコップ形土器について概観した。少なくともコップ形土器は、北トハーリスタンにおいてはPKⅢ期開始前後に出現し、多くの遺跡で出土することが判明したのである。これまでこの器形は、南トハーリスタンでは一切出土していない。もちろん、今後の調査で新たに出土する可能性を完全に否定することはできないのであるが、広い面積が調査されているチャカラク・テペ上層期 [樋口・桑山 1970]、さらに一部はPKⅢ期まで及んでいると考えられるコフナ・マスジッド最上層の発掘 [Veuve 1974] でも、一点も出土していないのである。また、クンドゥズ以東の平原を、アイ・ハヌム近辺までくまなく踏査したフランスのアフガニスタン考古学調査団による採集土器の報告書 [Lyonnet 1997] でも、把手などのそれらしい破片は一点も掲載していない。これとは対照的に、北トハーリスタンにおいては、かなりの頻度でコップ形土器が出土している。以上のことから、南トハーリスタンにはコッ

---

8) クョフ・クルガンについては、土器以外でも7世紀以降に下がる遺物が出土している。これによっても、「5世紀頃の小型要塞の出現」という事象が誤った編年観によるものであることが分かる。このことについては、これまで封建制開始の証拠のひとつとされてきた事象でもあり、別稿でさらにくわしく論じたい。

9) 出土地は現在のアフガニスタン西部と考えられ、トハーリスタンの領域外である。なお、これらの資料については、山内和也氏(東京文化財研究所)から様々なご教示をいただいた。記して感謝する次第である。

ブ形土器がほとんど流入していなかったと考えて問題ない。

したがって、これまでみてきたトハリスタンにおける土器の分布状況を確認すると、次のようになる。すなわち、PK I期～IV期を通じて、碗・瓶・大甕などに共通の変化がみられ、アム川南北がおおむね同じ様相を呈しているのであるが、PK III期以降には、北トハリスタンにしか出土しないコップ形土器が出現している。このことから、一体であったアム川南北の関係が、徐々に変化しているとも考えられるのである。

### III ソグド地域の様相

上にみたような土器分布圏の変化は、北トハリスタンにおけるコップ形土器の出現によって起こった事象である。しかしこの土器は、突然考案され、製作されはじめたものではない。トハリスタンからザラフシャン山脈を北に越えたオアシス地帯であるソグド地域から出土する資料を概観すると、コップ形土器はこの地域の人々が使用していたものであることが明らかになる。以下では、このソグド地域の資料を確認していきたい。

#### 1 ソグド地域の土器

トハリスタンにおけるPK III期からIV期に併行すると考えられるソグド地域の遺跡は、アフラシアブ、ベンジケント、ワラフシャなど数多く、旧ソ連の研究者たちが古くから発掘調査を行ってきた。これらの遺跡は、特に極彩色の壁画が出土することで著名であり、当該期のソグドの特徴として語られることが多い。こうした壁画と共伴する土器をみると、コップ形土器のほか、大型の壺で、肩部に注口のついた土器（注口付壺）が多く出土していることが分かる。

ベンジケントでは、トハリスタンとまったく同形の大甕とともに、コップ形土器と注口付壺が出土している（図6-1～3）。そして、これより古い時代の遺跡からも注口付壺が出土しているということであり [Бентович 1953: 137; Брыкина (ред.) 1999: 72]、ソグドでは古くからこの器形が存在した可能性が高い<sup>10)</sup>。アフラシアブでもコップ形土器と注口付壺が出土しており（図6-4）、広くソグド地域で使用されていたことがうかがえる。

注口付壺は、トハリスタンではこれまでほとんど出土例がないが、DTC Iで出土している（図3-3）ほか、ブリキナが編集した『初期中世の中央アジア』において、北トハリスタン出土土器の図版の中に1点図面が掲載されている [Брыкина (ред.) 1999,

10) ソグド地域の土器に関しては、これまでもいくつかの報告がなされてきた。しかし、不鮮明な写真のみであったり、図面が掲載されていても、その層位的な関係が不明である場合が多い。したがって、トハリスタン地域との厳密な併行関係が非常につかみにくいというのが現状である。今後、アフラシアブやベンジケントなどの土器について、詳細な報告書の刊行が望まれる。

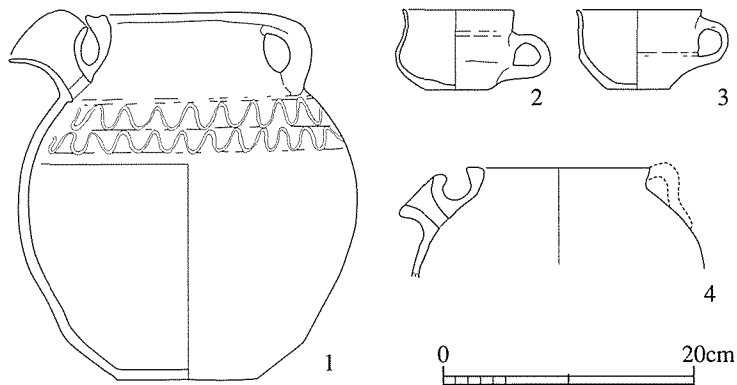


図6 ソグド出土のコップ形土器と注口付壺の一例  
(1～3：ベンジケント，4：アフラシアブ)

Таблица 94-38]<sup>11)</sup>。しかし、コップ形土器と同様に、これまで南トハリスタンでは出土していないのである。

コップ形土器に関しては、これを銀器の模倣として多くの器形と比較を行ったマルシャクの研究がある [Маршак 1961]。それによれば、本稿のコップ形土器はクルージュカ<sup>12)</sup> I 形式に相当し、サーサーン朝や突厥が使用していた金属器にその起源が求められるという。クルージュカ I 形式は7世紀に属する資料で、8世紀以降も把手の形が変化しながら継続するとされている。たしかにコップ形土器は、こうした金属器を模倣したものと考えられるが、金属器自体は出土地や出土状況が不明な資料がほとんどで、考古学的な立場から模倣土器の系統を詳細に検討することは難しいのが現状である。したがって、現段階でいえるのは次のようなことである。すなわち、サーサーン朝や突厥、あるいはソグド地域で製作されていた銀器を模倣することで成立したコップ形土器は、もともと製作されていた注口付壺などとともに、7世紀以降ザラフシャン山脈を南に越えて、北トハリスタンにまで流入した。しかし、これらの土器が南トハリスタンにまでもたらされることはほとんどなかったのである。

## 2 オッサリの分布

ソグド地域を特徴づける重要な遺物として、もうひとつオッサリを挙げることができる<sup>13)</sup>。オッサリは、中央アジアのゾロアスター教徒が用いた納骨器であり、様々な形のものが存在している。しかし、ゾロアスター教が国教として信仰されていたサーサーン

11) 出土地については一切触れられていないため、詳しい年代などを論じることができない。

12) 「コップ、ジョッキ」を意味するロシア語、кружка。

13) オッサリの起源がソグド地域にあるかどうかは判然としないが、その出土量や質から考えて、ソグドにおいて中心的に使用されていたことは疑いない。

朝の領域からは、これまでほとんどオッサリが出土していないことから、中央アジアのゾロアスター教徒によって作り出されたものと考えられている。これまでもその形式や図像、出土地の分布などについて様々な研究がなされており [香山 1963; Pavchinskaia 1994; Pugachenkova 1994], 国内では影山悦子によってこれらの研究がまとめられている [影山 1997]。

オッサリについて特に注目すべきなのは、その分布である。ソグドを中心として西はホラズムやメルヴ、東はセミレチエを經由して中国新疆まで広く出土しており、北トハリスタンでも、数は少ないものの、ダルヴェルジン・テパやハイラバード・テペなどで発見されている [Grenet 1984: 199; 影山 1997; 注1, 注27]。しかしその一方で、南トハリスタンではこれまで一例も出土していないのである。これは、コップ形土器や注口付壺の分布と共通しており、ソグド文化の一部は北トハリスタンにまで到達するものの、アム川を越えて南側へは伝わっていないことを示している。

もう一点注意すべきことは、オッサリと出土土器との関係である。ソグドの中心でもあったペンジセントでは、注口付壺出土例の多くがナウス（ここではゾロアスター教徒の墓を指す）においてオッサリと共伴しており [Ставиский, Большаков & Мончадская 1953: 83-84; Бентович 1953: 137], 両者が不可分の関係であったことをうかがわせる。実際、東西に広がるオッサリ出土地域からは、コップ形土器に加え、注口付壺も普遍的に出土しており、ホラズムのミズダフカンでは、ペンジセントと同様にオッサリと注口付壺が共伴して出土している [Ягодин & Ходжайов 1970]<sup>14)</sup>。これは、オッサリと注口付壺がセットで伝播した可能性を示している。すなわち、ソグドを中心として出土するオッサリとコップ形土器・注口付壺の三者は、ソグド文化の伝播とともに各地に広がったが、南トハリスタンまでは流入しなかったということができるのである。

#### IV 地域間関係の変化

以上、土器を中心にトハリスタンとソグドにおける考古遺物の分布とその変遷をみてきた。ここで明らかになったのは、ソグドの土器やオッサリの流入によって、南北トハリスタンの考古学的文化に違いが生じてくる様子である。北トハリスタンがソグドとの関係を強めるのに対して、南トハリスタンが孤立したということになる。もちろん、PKⅢ期からⅣ期にかけては、瓶や大甕などについて南北トハリスタンには共通性があり、その変化の方向も完全に一致しているので、両地域の定住民たちの間に交流が無くなっ

14) このほか、セミレチエのクラスナヤ・レーチカや、フェルガナのカイラガチでも共伴例が存在するようである [Брыкина (ред.) 1999]。また、これらの地域において広く土器が類似することについては、Беленицкий, Бентович & Большаков 1973などを参照。

たわけではなかろう。しかし、アム川を挟んで考古学的文化の分布が変化しはじめていることは明らかで、このPKⅢ期からPKⅣ期に、南北トハリスターンの関係が変化していったことを示している。

このような考古学的な分析の結果から、冒頭に示した「東西両史料における認識の違いがいかんして起こったのか」という問題に対する見通しを立てることが可能である。すなわち、7世紀から8世紀のトハリスターンでは、アム川の南北で生活文化の違いが現れており、7世紀後半以降にはじめてトハリスターンに進出したムスリムたちは、中国の伝統的な理解とは異なる範囲を「トハリスターン」と認識した、と考えられるのである。

それでは、この地域間関係の変化を引き起こした歴史的背景はどのようなものだったのだろうか。そもそも、変化のきっかけはソグド地域からの文化の流入であった。オッサリという宗教・葬送と関係のある遺物の出土や、文献にみられる広範なソグド商人の活動<sup>15)</sup>から考えれば、この文化流入は実際にソグド人の移動・移住に伴うものである可能性が高い。では、なぜ彼らは南トハリスターンにその足跡を残さなかったのか。これには、突厥のトハリスターン支配によって、ヒンドゥー・クシュ山脈を越える交通路が変遷したという桑山正進の説〔桑山 1985; 1990〕が参考になる。6世紀後半以後、それまでキダーラやエフタルが利用していたトハリスターンとガンダーラを結ぶカラコルム山脈中のルートが廃絶し、バーミヤーンからカーピシーに抜けるヒンドゥー・クシュ山脈西側の交通路が使用されるようになった。西突厥以前にこの地域を支配していたエフタルは、トハリスターンを本拠地とし、ヒンドゥー・クシュ山脈南側のガンダーラにもテギンを派遣して統治していた。しかし、天山北麓からチュー川流域のセミレチエに本拠を移してトハリスターンを支配した西突厥が登場すれば<sup>16)</sup>、おのずから支配域での交通のあり方が変化し、トハリスターンにおいてもこの影響が表れたと考えられるのである。すなわち、バーミヤーンからバルフを経てテルメズで北トハリスターンに渡河する場合、バルフから東の南トハリスターン地域にはまったく足を踏み入れないことになるであろう<sup>17)</sup>。これが、トハリスターンの南北における文化の違いとして表れたのである。

このように、支配者である遊牧民の動きによって、トハリスターン全体の物流のあり方

---

15) ソグド商人の広範な活動については、古くから様々な研究がある。羽田 1971, 護 1976, 吉田 1997 などを参照。

16) 統葉護可汗による牙庭の移動については、『旧唐書』西突厥伝によって知られる。玄奘がこの可汗に会ったのは、セミレチエの素葉城であり〔桑山 1987; 内藤 1988〕、『大唐西域記』によれば、この近辺もソグド語・ソグド文字を用いる「ソグド地域」であった。

17) 玄奘及び慧超の帰路を考えると、ヒンドゥー・クシュを越えてバルフには抜けず、直接トハリスターンの地（玄奘の場合は覩貨邏国故地たる安坦羅縛，慧超の場合は吐火羅国）に出て、そこからアム川をわたらずに東行してパミールを越えているようである〔桑山編 1992: 175〕。この場合、南トハリスターンは、アム川北側との連絡が手薄になる代わりに、カーピシー・カーブル地方との交流が盛んになる可能性が高い。

が変化するならば、彼ら遊牧民の存在が、定住民同士、あるいは遊牧民と定住民との間の交通・交流を媒介する役割を果たしていたと考えることができる<sup>18)</sup>。遊牧民による都市の侵入・破壊を想定するよりも、このように考えた方が考古学的事実とも矛盾しないのである。

それでもトハリスターンの地は、突厥が通設という官号を持つ人物を派遣して押さえた要地であり、南北トハリスターンの交通が完全に途絶えるわけではない。すでにみたように、精製土器にかなりの共通点があることから、そのことは十分うかがい知れる<sup>19)</sup>。しかし、『往五天竺国伝』によれば、720年代の慧超往訪時には、吐火羅葉護はその居城を大食、すなわちムスリム勢力に鎮押され、東のバダフシャーンへと逃れていた [桑山編 1992]。突厥が媒介していたアム川南北の交通が、この段階でかなり縮小していたことは確実であろう。また、ムスリム勢力進出の際には、概ねメルヴからアームルの渡河点を利用して直接ソグド地域に抜ける場合が多かったようであり [Gibb 1923; 桑山編 1992]、南トハリスターンの突厥支配期に続き、アム川南北を結ぶ主要な交通路からはずれたことは明らかである<sup>20)</sup>。

この結果が、考古学的事象に表れているとおり、南北トハリスターンの分離であった。早くとも7世紀半ば以降の当該地域しか知らないムスリムたちの目には、アム川南北が同一の生活文化を持つ地域とは映らなかった。そのために、彼らの手になる文献では、そのほとんどにおいて「トハリスターン」という地名は、アム川の南のみを指す名称となっているのである<sup>21)</sup>。

このち、中国側の文献でも、アム川南北の違いが認識された。『唐書』西域伝においては、「吐火羅は、……葱嶺（パミール）の西、烏澹河（アム川）の南に居る」としてアム川南のみをトハララの境域にあてている。ここにいたって東西両史料は、トハリスターンについて同一の認識に到達するのである。

18) 遊牧民と定住民との共生関係については多くの研究があり [護 1976; 間野 1977; 1999 など]、ここでそのすべてを網羅することはできないが、特に注 15 に触れたソグド商人と突厥の関係が好例であろう。いずれにしても、両者の具体的な関係を資料に基づいて明らかにすることは今後の課題である。

19) 本文では触れなかったが、口縁にスタンプを押捺する大甕の存在や、大甕の底部を抜いてパン焼きカマドに転用する方法など、生活文化の点で南北トハリスターンには共通性がみられ、これはソグドにも広まっている。

20) ムスリム勢力の進出によって交通の停滞が起こるのは、トハリスターンで実際に戦闘が頻繁に行われる間であり、一時的なものとも考えられる。

21) トハリスターンの中にバルフが含まれるかどうか、という点も多くの議論がある [桑山 1987: 127-129]。これは、アラビア語・ペルシア語史料がバルフ近辺を境にトハリスターンを上下に分けたこととも関係してくる問題である。本文でも触れたとおり、パーミヤーンからバルフを経てテルメズに抜けるルートが主要な交通路となっているなら、今後バルフ周辺からのみはソグド地域の土器などが発見される可能性が高い。この場合バルフは、ムスリムたちにとってトハリスターン（上トハリスターン）とは別地域として認識されることになる。今後のバルフ周辺での調査の進展に期待したい。

## おわりに

本稿では、7世紀から8世紀頃のトハリスタン地域について言及する漢文史料とアラビア語・ペルシア語史料の認識の違いがなぜ起こったのかを確認するため、当該地域の考古学的な分析を試みた。その結果、7世紀から8世紀にかけて、南北トハリスタンにおいて実際に出土遺物に相違が現れることが明らかになった。すなわち、ソグド文化の北トハリスタンへの拡散による、南北トハリスタンの考古学的文化における分離である。そしてその背景には、突厥のトハリスタン支配によって交通路が変化したという事実、ムスリムの進出による地域間関係の変化といった事象があると想定した。

注意しなければならないのは、ムスリムの進出が続いている最中も、南北トハリスタンが政治的には一体だったことである。例えば、719年に唐に朝貢してきた吐火羅葉護（トハラ・ヤブグ）、すなわちトハラの王は、支汗那王の帝賒という人物であった可能性が高いが〔桑山編 1992; 150-152〕、支汗那王とはチャガーニアン王を意味する。チャガーニアンは、現ウズベキスタンのスルハン・ダリヤ下流域一帯を指す地域名であり、アム川南北が政治的にひとつであったことを示唆する。同様に、『冊府元龜』外臣部封冊の開元17(729)年条には「吐火羅の骨咄の祿頡達度を冊立して吐火羅葉護・悞怛王と為す」とあり、骨咄はフッタル、すなわち現在のタジキスタン南部を指す地域名であるから、前の例と同様にアム川の北なるフッタルの王が、少なくとも名目上は南北トハリスタンを統合していたことがうかがえる。しかし、こうした名目的な政治領域とは無関係に、地域間関係の変化が起きているのである。

今後は、新たな考古資料によって今回確認した南北トハリスタンの違いを、さらに具体化することが重要である。特に生活文化に密着した考古遺物、あるいは遺構の構造などを細かに検討することが課題となる。これらの作業を行うことではじめて、トハリスタンにおける遊牧民と定住民の関係についても考察することが可能となるだろう。こうした資料を得るためには、南トハリスタン地域での発掘の進展が必要である。アフガニスタン政情のさらなる回復を願いたい。

## 図版解説

- 図1 トハリスタン周辺地図
- 図2 トハリスタンの土器（碗・瓶は1/6、大甕は1/24。各報告書より再トレース）
- 図3 DTC Iの出土土器（田辺・堀他 2000、田辺・山内他 2001より再トレース）
- 図4 ザール・テパ城塞の出土土器（Аннаев 1988より再トレース）
- 図5 クヨフ・クルガンの出土土器（Аннаев 1984より再トレース）

図6 ソグド出土のコップ形土器と注口付壺の一例

(1～3: ペンジケント, 4: アフラシアブ。各報告書より再トレース)

## 参考文献

- МИА: Материалы и Исследования по Археологии СССР.
- Аннаев, Т. Д. (1984) Раскопки Раннесредневековой Усадьбы Куёвкурган в Северном Тохаристане. Советская Археология. 1984 (2), 188 – 200.
- Аннаев, Т. Д. (1988) Раннесредневековые Поселения Северного Тохаристана. Ташкент.
- Беленицкий, А. М. (1958) Общие Результаты Раскопок Городища Древнего Пенджикента (1951 – 1953 гг.). МИА 66, 104 – 154.
- Беленицкий, А. М., И. Б. Бенгович & О. Г. Большаков (1973) Средневековый Город Средней Азии. Ленинград.
- Бенгович, И. Б. (1953) Керамика Пянджикента. МИА 37, 133 – 145.
- Брыкина, Г. А. (ред.) (1999) Средняя Азия в Раннем Средневековье. Москва.
- Gibb, H. A. R. (1923) *The Arab Conquests in Central Asia*. London.
- Grenet, F. (1984) *Les Pratiques Funéraires dans l'Asie Centrale Sédentaire de la Conquête Grecque à l'Islamisation*. Paris.
- Grenet, F. (2002) Regional Interaction in Central Asia and Northwest India in the Kidarite and Hephthalite Periods. In: Sims-Williams, N. (ed) *Indo-Iranian Languages and peoples*. Oxford, 203 – 224.
- Гулямов, Я. Г. (1973) Афрасиаб. выпуск II. Ташкент.
- 羽田明 (1971) ソグド人の東方活動『岩波講座世界歴史』6, 岩波書店, 409 – 434.
- 稲葉 穂 (1991) 七-八世紀ザーブリスターンの三人の王『西南アジア研究』35, 39 – 60.
- 岩井俊平 (2003) ポスト・クシヤン期バクトリアの土器編年『西アジア考古学』4, 41 – 54.
- Ягодин, В. Н. & Т. К. Ходжайов (1970) Некрополь Древнего Миздахкана. Ташкент.
- 影山悦子 (1997) 東トルキスタン出土のオッサリ (ゾロアスター教徒の納骨器) について『オリエン』40 (1), 73 – 89.
- 香山陽坪 (1963) オッサリについて —— 中央アジア・ゾロアスター教徒の蔵骨器 —— 『史学雑誌』72 (9), 54 – 68.
- Кругликова, И. Т. (1974) Дильбержин. Часть 1. Москва.
- Кругликова, И. Т. & Г. А. Пугаченкова (1977) Дильбержин. Часть 2. Москва.
- 桑山正進 (1985) バーミヤーン大佛成立にかかわるふたつの道『東方学報』57, 109 – 209.
- 桑山正進 (1987) 『大唐西域記』(訳注) (『大乘仏典』中国・日本編9) 中央公論社.
- 桑山正進 (1990) 『カーピシー＝ガンダーラ史研究』京都大学人文科学研究所.
- 桑山正進編 (1992) 『慧超往五天竺国伝研究』京都大学人文科学研究所.
- Литвинский, Б. А. & В. С. Соловьев (1985) Средневековая Культура Тохаристана.



Москва.

Lyonnet, B. (1997) *Céramique et Peuplement du Chalcolithique à la Conquête Arabe. Prospections Archéologiques en Bactriane Orientale* Volume 2. Paris.

前田耕作・田辺勝美編 (1999) 『世界美術大全集 東洋編』15 中央アジア. 小学館.

前嶋信次 (1971) タラス戦考『東西文化交流の諸相』東西文化交流の諸相刊行会, 129-200.

間野英二 (1977) 『中央アジアの歴史』講談社.

間野英二 (1999) 中央アジアのイスラーム化 間野英二 (編) 『アジアの歴史と文化』8 中央アジア史, 同朋舎, 82-93.

Маршак, Б. И. (1961) Влияние Торевтики на Согдийскую Керамику VII-VIII Веков. Труды Государственного Эрмитажа 5, 177-201.

Minorsky, V. (tr.) (1970) *Hudud al-'Alam* (2nd ed). London.

護 雅夫 (1976) 『古代遊牧帝国』中央公論社.

内藤みどり (1988) 『西突厥史の研究』早稲田大学出版部.

Pavchinskaia, L. V. (1994) Sogdian Ossuaries. *Bulletin of the Asia Institute* 8, 209-225.

シャキル・ピダエフ (加藤九祚訳) (2001) ザール・テパ都城址『アイハヌム』2001, 27-44.

Piggott, S. (1949) Sassanian Motifs on Painted Pottery from North-West India. *Ancient India* 5, 31-34.

Pugachenkova, G. A. (1994) The Form and Style of Sogdian Ossuaries. *Bulletin of the Asia Institute* 8, 227-243.

Пугаченкова, Г. А., Э. В. Ртвеладзе и др. (1978) Дальверзинтепе. Ташкент.

Седов, А. В. (1987) Кобадиян на Пороге Раннего Средневековья. Москва.

Соловьев, В. С. (1996) Раннесредневековая Керамика Северного Тохаристана. Елец.

Ставиский, Б. Я., О. Г. Большаков & Е. А. Мончадская (1953) Пянджикентский Некрополь. МИА 37, 64-98.

田辺勝美 (1994) ローマと中国の史書に秘められた「クシャノ・ササン朝」『東洋文化研究所紀要』124, 33-101.

田辺勝美 (監修) (2000) 『平山郁夫コレクション ガンダーラとシルクロードの美術』朝日新聞社.

田辺勝美・堀晁他 (2000) ダルヴェルジン・テペの発掘 (1999年度調査の概報) 『古代オリエント博物館研究紀要』XX, 101-162.

田辺勝美・山内和也他 (2001) ダルヴェルジン・テペの発掘 (2000年度調査の概報) 『古代オリエント博物館研究紀要』XXI, 89-151.

樋口隆康・桑山正進 (1970) 『チャカラク・テペ』京都大学.

内田吟風 (1972) 吐火羅 (Tukhala) 国史考『東方学会創立二十五周年記念東方学論集』東方学会, 91-110.

Veuve, S. (1974) *La Céramique de Kohna Masdjid. Travail d'Etudes et de Recherches Présent en vue de la Maîtrise spécialisée d'Histoire de l'Art et Archéologie*, Université de Bordeaux.

山内和也（2001）アフガニスタン出土のサーサーン朝後期の彩文土器について『第8回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会』ヘレニズム～イスラーム考古学研究会，28-35.

吉田 豊（1997）ソグド語資料から見たソグド人の活動『岩波講座世界歴史』11 中央ユーラシアの統合，岩波書店，227-248.

（京都大学大学院文学研究科）